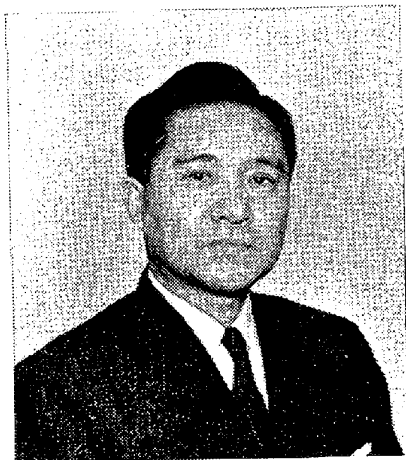


巻 頭 言

時 の 脚

今 井 勇 之 進*



昨年春か一昨年か、いつか新橋駅前で関西方面から上京した陳情団を見たことがある。中共との貿易拡大によつて深刻な不況を打開しようとして国会へ行く処であつた。

この人々はどれだけの期待を持つて陳情に行くのか知らないが、一体中共との貿易がそんな安易なものであらうかと思ひながら見送つたものである。1953年に初まつた工業国家建設の第1次5ヶ年計画が成功し中共がどしどし変貌しつつあることを聞いているからであつた。

聞く処によれば中共は技術的到達目標を英国において、第3次5ヶ年計画終了迄に英国に追付き追越すという大悲願を立てて国力を傾倒してるといふことで、その変貌躍進ぶりについては新聞雑誌等からもある程度の推測が出来る。

現に1958年度には多数の Low Shaft Furnace の建設によつて鉄鋼生産1000万トンを超えたといふし、新農耕法によつて米の大豊作を報じてもいる。

現在中共へ行つてゐる社会党使節団に対しても「見せてやる」「会つてやる」「教えてやる」といつた高飛車な態度をとつてゐるといふことで(3月12日産経)貿易の再開にも簡単には応じようとしなないのもその工業力の発展に深い自信を得た結果もあるように思われる。時の脚の速さは15年前には日本の豊饒な市場だつた中国を日本の強大な競争国に育て上げるのも極く近い将来と思われる。事実中国が有する大きい地下資源を見るとそれが決して不可能なことは思われぬ。

中共とともにその龐大な地下資源と強力な政治態勢で遮二無二工業化立国に踏み切つて将来の強大化を全世界から注目されているのが印度であるが、その地下資源特に金属資源を調べる機会を得たので御紹介したい。

すたわちアルミニウムは稼行可能の Bauxite, Diaspore が2800万トンで、Bombay州では年産2万トンの Plant を計画中である。東部でも Al 精錬の計画があると聞いている。

クロムについては Cr 45% 以上が200万トン位と考えられ、Mysore州の Byrapur の山は良質の鉍石深さ800ftに達し現在わかつてるだけでも80万トンでなお探鉍中である。特に北方Orissa地方の鉍石は Cr:Fe=3:1 以上で Ferro-Chrome 製造に適していた。

コバルト、銅、ニッケルは現在の処では貧弱である。

鉄は主に Hematite で2124000万トンといわれ Bihar, Orissa 州境の Singhbhum 地方だけで80億トン、これがいずれも60% Fe 以上あるいは65% 以上の良鉍であり、中には Badan Pahar のごとく世界最大最良質といわれる山も含まれ、採掘はすべて露天掘で行けるのみか、ほとんど表土も含まぬ全山鉍石の山が連らなつてゐる。Hematite の外に6億トンの磁鉄鉍、5億トンの褐鉄鉍を有し、この巨大な鉄鉍資源を背景にして、近代化された Tata 製鉄所の他に最新鋭の Madhya Pradesh, Rourkela, Durgapur がいずれも本年中には全稼働に入る。

マグネシウム、これは未調査の部が多いが、Madras の近くには厚さ100ftにおよぶ広大な MgCO₃ があつてこの山だけで8200万トン以上と考えられ他にも相当のものが発見されつつあるといふ。

* 東北大学金属材料研究所、教授、工学博士

マンガンは Mn 42% 以上の船積級のものでも 6700 万トン、少し Mn% を下げると 1億トンを超えるという。

チタンは Ilmenite が多く西部 Travancore Coast には 100 哩にわたって TiO_2 55% 以上のものが 5億5千万トンといわれる。トリウムは特に全世界の注目を浴びてゐるもので主に Ce と共存して ThO_2 8-10% を含む Monazite 砂が西海岸に続き、現在容易に採取可能な Th が 20 万トン以上という。

しかし印度は總体的に未調査の部が多いので近い将来これ等の数字は大きく上廻るかも知れない。現に Th は 1958 年には 15 万トンと発表されたのに今年には 20 万トンにはね上つてゐるのである。金属ではないが石英も多くまた石油資源が続々発見されつつある。

印度も 1962 年で第2次5ヶ年計画を完了する予定であり、ここで年産 600 万トンの鉄鋼生産の成功の見透がついてゐるが、第2次、更に引続いて行われる筈の第3次5ヶ年計画遂行のための基幹になる電力の開発、鉄道の拡充についても相当積極的な政策を取つてゐる。鉄道の拡充も今年度の敷設予定を見るとほとんど総てが電力開発のためであり、鉱山開発のためであること、高額所得者が極めて高額な税に耐えている等から見ても印度が挙国工業立国化に邁進していることがよくわかる。この2月中旬 Madhya Pradesh (もしかしたら Durgapur?) 製鉄所の火入式に際しては大新聞 Statesman が数頁にわたる特輯号を発行して詳細に国民に紹介しており、国民(もちろんインテリ階級であるが)もよくこれ等に記載されてゐる数字を記憶して誇りげにこれを話題に乗せるということである。

輸出、輸入等についても国家が 1956 年以来 State Trading Corporation (S.T.C. と称す) を制定して強力に統制を加へてゐることもよく知られた事実である。また外貨の使用に関しても慎重であり一つの施設の建設についても広く分割請負をして価格の低下を図つてゐるようである。例えば Madras 州の西部にある Periyar 水力発電所は 2300 KW \times 3 でそれ程大きいものではないが、最初に作る水路の Howlage は日本の日立、Penstock は日本の酒井鉄工所、発電所、建物、スイス、水車、発電機西独、100 ton 走向クレーン、ハンガリーといつたように分割請負である。

最近時の脚の速さはまことに驚くべきもので工業技術の面でも今日の優位は決して明日の優位を保証しない。しかも印度には世界の各国がきわめて低利の資金を競つて投入しつゝあることを思えば日本は安閑としてはおられない。

印度の有する巨大な資源と豊富な低利外貨と工業立国化への挙国態勢、これ等にもまして多くの印度国民が明日の輝かしい祖国に寄せる期待に満ちた晴々とした表情を見ると、輸入した原料で作つた製品を輸出する外に生きる途がない日本から行つた私には実に印象深いものがあつた。言葉の不自由な私が、たつた3週間の印度見学を、敢えて全く敢えて記事に取上げた所以である。